

2026年4月5日 柵原キリスト教会 イースターファミリー礼拝
ヨハネによる福音書 20章 11～18日 「マリアよ」 小林光生牧師

ハッピー・イースターの賛美をしました。もう一度さんびしましょう。

♪ ハッピー イースター イエス様が

ハッピー イースター

じゅじかに かかり

ハッピー イースター イエス様が

ハッピー イースター

ぼくらのためによみがえられたから ♪

去年のイースターの礼拝でイエス様が十字架に架かれたのは金曜日でよみがえられたのは日曜日であったことをお話しました。

イースターの朝、イエス様がよみがえられたのです。十字架にかかり死んでしまったのに、三日目にもうよみがえり、いきかえりある人に声をかけられたのです。



左の絵で真ん中の方は、男の方ですか？女の方ですか？そうです。女性です。

男の弟子たちはどうしたのでしょうか。「ああ、イエス様は十字架につけられて死んでしまった。わたしたちも同じような目にあうかもしれない。やばい、こわい！」と考えたのではないのでしょうか。

この女性の名前は、マグダラのマリアです。あれ！イエス様のお母さんの名前もマリアでしたね。マグダラとは、場所の名前です。

このマリアさんは手に何かをもっています。何でしょうか。

におい油でしょう。死んでしまったイエス様の体に塗るためでした。

まずその前に前の二人はだれでしょうか。天使たちです。普通の男の人みたいですね。天使たちは「なぜ泣いているんですか」と聞きました。

「あなたたち、だれかが、わたしのイエス様を取ってどこかに持って行ってしまったのです！あなたたち知らない？」

そのマリアにイエス様は声をかけられたのです。

イエス様はどこにおられるのでしょうか。そうです、前の二人ではなくて後ろにおられ

るたのです。これが、ヨハネによる福音書の特色ですね。

その場面を聖書からもう一度読んでみましょう。

ヨハ 20:14 こう言って後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。しかし、それがイエスだとは分からなかった。

ここで、マグダラのマリアは、復活されたイエス様をみたのです！でもわからなかったのです。なぜでしょうか。それは、「わたしのイエス様、だれかが運びさってしまった！」悲しみのあまり、泣いてしまっていたのです。自分の悲しみの世界しか見えなかったのです。

みなさん、今日はイースターです。今もイエス様は生きておられ、わたしたちと一緒にいてくださるのです。「主は今、生きておられる、わがうちにおられる！」と賛美しますが、イエス様を信じていないひとにとっては、「なにそれ？」ではないでしょうか。

ヨハ 20:15 イエスは言われた。「女よ、なぜ泣いているのか。誰を捜しているのか。」マリアは、園の番人だと思って言った。「あなたがあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか、どうぞ、おっしゃってください。私が、あの方を引き取ります。」

でもイエス様のあることばをマグダラのマリアにかけられたのです。その時にわかったのです。「わたしのイエス様が生きておられる！」

ヨハ 20:16 イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。

自分の悲しみの世界から主イエスのほうに振り向いて、イエス様の声を聞くのです。今日の中心聖句です。

そうです、復活の主イエスがこのマグダラのマリアにむかって「マリアよ」聖書には「マリヤ<よ>」の<よ>はありません。イエス様は、このマリアに対して「何やっているの！」と叱るように「マリヤ！」言われたのではないでしょう。

わたしたちのお父さん、お母さんもただ叱りつけるときの「○○！」ではなくて、優しく教えるように呼びかける「○○！」ではないでしょうか。（○○に自分の名前）

また「マリアよマリアよ」と何回も呼ばれたのではありません。

「マリアよ私だよ、わかりますか？」ではありません。

たった一言「マリア」です。そのそのことばで「イエス様だ」とわかったのです。

その時にマリアは何と言ったのでしょうか。「ラボニ・先生！」

「ラボニ！」とはヘブル語で「先生！」という意味です。

ある英語の聖書では「マスター・主人」とあります。「私のご主人！」

みなさんは、学校の先生をどのように呼びますか？

「ラボニ」は、このマリアさんが話した「生の声」です。「せんせい～」とすがりつくような叫びではなかったでしょうか。その時です。

ヨハ 20:17 イエスは言われた。「私に触れてはいけない。まだ父のもとへ上っていないのだから。私のきょうだいたちのところへ行って、こう言いなさい。『私の父であり、あなたがたの父である方、また、私の神であり、あなたがたの神である方のもとに私は上る』と。」

この「触れてはいけない」は別の訳では「わたしにすがりついてはならない」とあります。「イエス様！あなたは私だけのものです！」というような感じでしょうか。ここで、復活のイエス様は、「すがりついてはならない」と言われるだけでなく、このマグダラのマリアに使命・ミッション（イエス様のために〇〇をきなさい）をあたえられたのです。

実はこのマグダラのマリアは、イエス様に会える前は、「7つの悪霊、悪の力に支配されていた」「あのひどい女」と言われていたのです。

そのマリアにこのイースターに最初に出会ってくださったのです。

そうしてこのことを男の弟子たちに伝えなさいというミッション（使命）を与えられたのです。

ヨハ 20:18 マグダラのマリアは弟子たちのところに行き、「私は主を見ました」と告げ、また、主から言われたことを伝えた。

今日のイースター、復活のイエス様は、あなたにミッション・使命（イエス様のために〇〇をきなさい）をあたえられるのです。

使命とは、命を使うと書きますね。何のために命を使うかが、今日の大きなメッセージです。

今日はこのイエス様にあつての使命、ミッションを与えられた女性を紹介します。

三浦綾子さんです。この方の書かれた本を読んだこのある方は？

（教会の本棚に三浦綾子さんコーナーがあります。また受付に先日東京で手に入れた三浦綾子さんの単行本があります。借りて読んでください。こどもも将来読んでみてください）

この女性が書いた小説「氷点」（1960年代の作品ですが、「笑点」というテレビ番組もこの氷点を真似た、もじったタイトルです）がテレビドラマになって放送されました。すると、最終回の視聴率が関東地方で42.7%を記録し、放送時間には「銭湯の女湯が空

になる」と言われるほどだそうです。また全国で「氷点ブーム」を巻き起こしました。

三浦綾子さん本人のことです。太平洋戦争中、北海道で高等学校を卒業したあと小学校の「先生」になったのです。戦争中は天皇が神さまであり、兵隊さんも天皇の名のもとに戦争にでかけたのです。戦争が終わりました。すると今までの教科書の何ページの10行目から20行目までは「墨で塗って読めなくするようにしなさい。これは間違っていた」と生徒に命じなければならなかったのです。

綾子さんは自分が持っていた子どもを教えるという＜先生としての使命＞がどこかに行ってしまったのです。そうして自分の命はどうにでもなれ！と思って学校の先生をやめてしまった。そのあと重い病気（結核）で13年も寝たきりの生活になってしまったのです。自分の命を使ってこれをしたというのがなくなってしまったのです。

そのような時に、やがてクリスチャンで結婚する三浦光世さんと出会うのです。「綾子さんイエス様を信じなさい。あなたは素晴らしいものを神さまから与えられていますよ」そうして、のちに実際に「小説を書く」「イエス様のことを紹介する」という使命・ミッションが与えられたのです。

今日のイースターの朝、わたしたちにも復活のイエス・キリストは「使命」を与えてくださっています。そうです、イエス様のために生きる者（命を使う者）とされているのです。

子どものみなさん、「自分が生きていても、死んでもどうでもいい」という将来ではなくて、イエス様のために、家族のために、またこの日本のために、もっと大きくいうならば、世界のために働くことができるようになるのです。

また病院のベッドの上におられる方であっても、「自分は何も出来ない」ではありません。祈ることができるのです！感謝することができるのです！そうして、イエス様が今も生きておられることをあかしすることができるのです。

ヨハ 20:16 イエスが、「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、「ラボニ」と言った。「先生」という意味である。

イエス様は、このイースターのこの朝、私たち一人一人の名前を呼んでくださるのです。わたしたちも「ラボニ・先生・マスター」と答えましょう。

主イエスは、学校ばかりでなくて、人生の、一生がいの「先生・マスター」となったださるのです。

またこの後に賛美するように「わが主イエス」と答えさせて頂きましょう。イエス様は今も生きて、わたしの内にいてくださるのです。感謝ですね。